

友松対談 ⑤

出陣学徒の戦中と戦後

【平成 23 年 11 月記録】



語り手 友松会元会長

織 茂 領 (昭和 18 年 神奈川師範卒)

聞き手 黒川 鈴谷 (昭和 35 年 横浜国立大卒)

黒川 本日はお忙しい中、お話を伺う時間をおつくり頂きまして有難うございました。この機会に先生の戦時中の体験やら、戦後に教職に戻られてからの

ことなど、いろいろ聞かせて頂きたいと思いますので、宜しくお願いいたします。まず始めにお聞きしますが、先生が師範に入学されたのはいつですが。

織 茂 私は昭和 13 年の 4 月に、師範の予科に入学しました。卒業したのは昭和 18 年の 9 月 27 日です。本当は昭和 19 年の 3 月末の卒業でしたが、戦時下で半年早く繰り上げ卒業になったのです。もっとも私は第 13 期海軍飛行専修予備学生の採用通知を受け、9 月 10 日に土浦海軍航空隊の門をくぐっていましたから、卒業式のときには学校にはもういませんでした。

黒川 資料によると海軍の飛行科予備学生は 1~12 期までは合計で 445 名だったのが、戦局の悪化にともないパイロットの消耗が激しかったので、この 13 期は一举に 4,726 名を採用し、1 年も経たないうちにそのうちの 1,607 名が戦没したという「悲劇の 13 期」ですね。

織 茂 私は海軍に志願する前に、実は陸軍の儀仗兵に合格していたんです。

黒川 その「儀仗兵」というのが、よく分からないのですが。陸軍の兵科にも兵種にも儀仗兵というのはありませんね。

織 茂 儀仗兵というのは近衛兵で、馬に乗って天皇陛下の近くで護衛の任に当たったり皇居の周辺を回ったりするのです。ですから名誉な役目であるし、それから戦争中はおおっぴらには言えませんでした。ところが海軍のしかも飛行科に志願したので、親に猛反対されました。

黒川 当時の人は飛行機は落ちるものだと思っていましたからね。それにしてもご両親の反対を押し切って、飛行予備学生に志願したのは何故なのですか。

織 茂 大空への憧れと、そこで戦うことの華々しさに惹かれたのでしょ。なにしろ開戦以来の海軍航空隊の活躍はすごかったからね。それと何となく陸軍より海軍のほうがかっこいいという気分もありましたね。



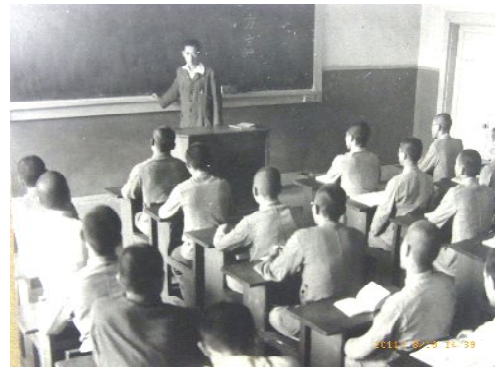
神奈川師範校長 木下一雄先生

黒川 5 千名近く採用したといっても、全国の大学・高専の卒業生 5 万数千人が応募したと言われていいますから、倍率はざっと 10 倍でかなり競争は激しかったと言えますね。こういう海軍予備学生の募集があるということは、どんな風にして知ったのですか。



師範時代の織茂先生

- 織 茂 昭和 18 年の 5 月頃に、学校の掲示板に貼ってある 印刷物で知りました。
- 黒 川 師範全体では何人くらい応募したのですか。
- 織 茂 志願の願書は各個人で出したのではっきりとは覚えていませんが、そんなに多くはなかったと思います。せいぜい十数人だったでしょう。
- 黒 川 戦時中、中学生(旧制)を対象とした甲種飛行予科練習生(甲飛)の募集では、全校で熱狂的な反応をした学校もあったと聞いていますが、師範では予備学生についてそんな雰囲気はなかったのですね。
- 織 茂 特にはそんな雰囲気は無かったですよ。ただ海軍に入隊が決まった後で、私と一緒に入隊する同級生の岡部正雄君の二人を、在校生が講堂に集まって励ましてくれました。それから校長室に行って木下校長に入隊の報告と挨拶をしました。それならちょうどその席に、普段私たちを教練の授業で鍛えた陸軍の師範配属将校が居て私の報告を聞くと「そうか、死んで来い。」と言いました。
- 黒 川 これから戦争に行こうとする若者にずいぶん無慈悲な言い方ですが、でもそれが当時の時代の空気だったのかもしれないね。
- 織 茂 戦争が終わってから、私は木下先生の所にご挨拶にいきましたが、先生もご子息を戦争で亡くされたとのことでした。
- 黒 川 13 期飛行予備学生の資料を見ると、「10 月 4 日、入隊式。2,600 名に基礎教程を 4 ヶ月又は 2 ヶ月で習得させる。基礎教程 2 ヶ月の前期学生は、各大学や専門学校の理工科関係専修の学生と師範学校の課程を修めた者。4 ヶ月の後期学生はそれ以外の者。」とあります。先生は師範の卒業生ですから、もちろん前期学生だったのでしょね。
- 織 茂 そうです。前期学生でした。
- 黒 川 そこでちょっと分からないのですが、前期の学生は理科的な知識の素養があるのでその分 2 ヶ月短縮するということだと思います。理工科の学生は分かりますが師範の卒業生は必ずしも理工科方面が専門でない人もいると思うのですが。
- 織 茂 師範の卒業生全員が前期の学生になったわけではなく、後期に回った人もいます。採用試験のときの数学の成績にもよったのでしょう。それと当時の師範学校は、在学中に軍事教練をそうとうみっちり叩き込まれましたから、その点での評価は高く、それが前期に回された理由の一つかもしれません
- 黒 川 なるほど、よく分かりました。「前期学生は昭和 18 年 10 月初めから 11 月 30 日までの二ヶ月間の基礎教程を修了すると、適性検査によって操縦と偵察に分けられ、操縦は更に陸上機と水上機とに分けられた。」とあります。先生は水上機の操縦でしたね。
- 織 茂 そうです。私は水上機の操縦学生として、71 名の仲間とともに霞ヶ浦から少し離れたところの北浦航空隊に行きました。だが北浦へ話に移る前に、土浦時代の忘れられない思い出があるので、その話をしましょう。
- 黒 川 どんな話ですか。
- 織 茂 土浦で訓練中のある日、訓練が終わった後で私一人だけ分隊長の佐藤大尉(予備学生 3 期)に呼び出され「兵舎の周りを駆け足で回って来い。」と言われました。私は何かまずいことをして罰をくらったのかと思ったのですが、そうではなく分隊



師範での授業風景

長は「兵舎の陰にお前のお母さんと弟が来ているから、会ってこい。」と言われるのです。母は私に会いたい一心で弟を連れて航空隊に来たのですが、まだ入隊して間もない私には、普通では面会は許されないのです。そこで分隊長は正式の面会ではなく、偶然出会ったという形で、母と弟に会わせてくれたのです。このときの分隊長の恩情は、とても嬉しくありがたく思い、今でも忘れません。

黒川 そういう上官の下でなら、懸命にやろうという気持ちになるでしょうね。

織茂 軍隊だけでなく、普通の職場でも部下のことを考えてくれる上司がいれば、部下は一生懸命やりますよ。どこでも同じです。

話をもとに戻すと、北浦空は、現在の潮来市北浦にあった練習航空隊で、ここで水上機の操縦訓練を受けました。ここで出会った分隊長荒井秋雄中尉も忘れられない人です。



海軍時代の織茂 領先生



北浦航空隊時代の仲間たち

黒川 その話は私が書店で見つけた『土門拳が撮った予科練の写真』という本の中に出ていました。そのことが動機となって、今日こうして先生のお話を聞いているのですが。

織茂 荒井さんと言う人は学校出でなく、叩き上げの士官で愛媛県出身でした。ある日の飛行訓練で私は最後の順番だったのですが、指揮所の荒井分隊長に出発報告に行くと、分隊長から「最終搭乗者だから、おそらく燃料がなくなっていると思う。燃料を補給して出発せよ。」と命じられました。練習機

上の後席に待機する教官の高嶋分隊長士に分隊長の意向を伝えると、教官は計器を見て「1人分はあるから大丈夫。」とそのまま飛行訓練に出発しました。

飛行作業終了後の整列の時、分隊長に「織茂学生、一歩前へ」と呼び出されました。荒井分隊長は「わしが注意したのに、なぜ燃料を補給せんかったか」と無念そうな顔をした途端、一発ビンタが飛んできました。

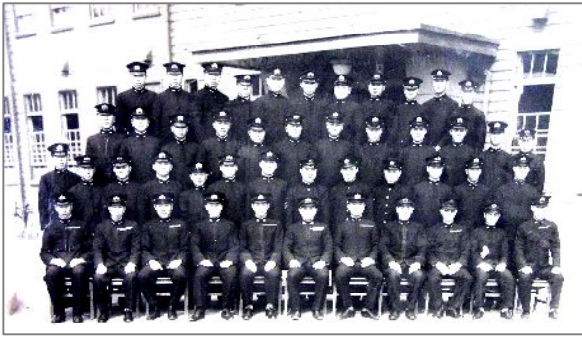
黒川 同乗の教官が要らないと言うのに、それでも補給しましょうとは言えませんね。それで叱られては堪りませんが、腹は立ちませんでしたか。

織茂 いやその時は、燃料切れで事故でも起こったらと、部下を思う分隊長の気持ちがひしひしと伝わってきて、殴られても少しも悔しくありませんでした。

黒川 咄嗟の間に相手の気持ちが分かるのは、日頃からその荒井さんという上官に心服していたからでしょうね。

織茂 荒井分隊長は、歴戦の古武士を思わせるような風格と威厳を漂わせた人で、日頃から「水上偵察機操縦は地味な仕事だが責任が重く、ことに当たっては沈着冷静、剛毅果断を信条とするように」と語っておられました。

私はその人間的な魅力を感じていましたので、叱られてもその真意が分かったの



飛行予備学生 修業記念 昭和 19 年 5 月 24 日

最後列 左から 5 人目が 織茂先生

だと思います。

真意が分かったのだと思います。

黒 川 まさに上官と部下との、理想的な関係だったのですね。

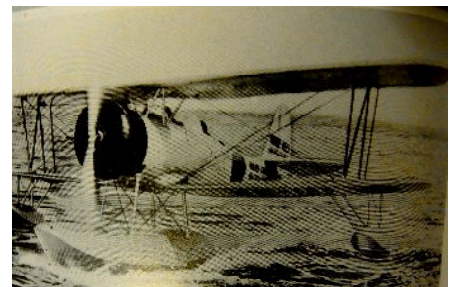
織 茂 この話には更にその後があります。翌朝の課業始めの整列で、分隊長が突然、「わしは謝らなければならない。昨日、織茂学生を殴ったのはわしの誤りだった」と全員の前で陳謝しました。

恐らく高島分隊長から事情を聞いた

たのでしょう。この言葉を聞いて私は、「絶対服従の時代の軍隊で自己の過ちを認めて全員の前で謝るとは、なんと潔い暖かい態度であろうか」と思い、涙が滲んできました。また分隊長に、自分の判断で燃料補給をしなかった事実を率直に報告した高島分隊長の人柄にも感激しました。私が今日に至るまで海軍時代を懐かしく思い、その頃の仲間との交流を絶やさないのは、このような人間的に優れた上官に出会うことが出来たからだと思います。

黒 川 成るほど、戦後の風潮として軍隊の非人間的な面が強調されましたが、どんな世界にも、人間的に優れた人はいるのですね。それで、北浦での操縦訓練のあと、先生は何処の航空隊に赴任されたのですか。

織 茂 昭和 19 年 9 月に実用機教程も修了し、海軍少尉に任ぜられるとともに教官配置を命ぜられ、愛知県の知多半島にあった第二河和航空隊に赴任しました。河和では大学・高専在学中に海軍予備生徒に合格した 70 余名の 1 期生徒の先任分隊長として指導に当たりました。ここでもいろいろ思い出がありますが、一つ挙げるとすれば、70 名の予備生徒全員に一人二発のビン



95 式 水上偵察機

タをする羽目になったことです。海軍では新入隊や乗艦の際に「活をいれる」と称して、全員に体罰を与える習慣があります。ところが予備生徒は下士官の教員より階級が上なので、教員は活をいれることが出来ません。立場上私がやらざるを得なくなったのです。でもいくら戦時下とはいえ、無抵抗の人間を張り飛ばすのは厭な経験でした。この経験から以後私は意味の無い制裁は中止して、制裁の代わりに隊内マラソンに切り替えました。

黒 川 20 年 8 月 15 日の終戦は、この第二河和航空隊で迎えられたのですか。

織 茂 いや、私は河和のあと名古屋航空隊に転勤し、陸上機の彩雲偵察機操縦員となりました。この頃になると飛行機搭乗員の消耗が激しく、比較的消耗が少なかった水上機のパイロットを陸上機に換わらせたのです。彩雲は日本海軍最速の偵察機で、速度を上げると翼端がしなるような感じでした。

黒 川 彩雲の搭乗員が、米軍の戦闘機がどれも追いつけないので「我に追いつくグラマンなし」という無電を打って喜んだという伝説の飛行機ですね。

織 茂 その後、この彩雲偵察隊が千葉県の本更津基地に移動し、そこで終戦を迎えたのです。終戦の後、部隊は福島県の第二郡山航空隊に集結し、他の部隊とともに立てこもって抗戦するのかと思ったのですが、彩雲隊の隊長が全隊員を集めて「日

本を立て直す為に頑張ってもらいたい」と言われ、隊の解散を宣言されました。この時の隊長の決断によっては、今日の私は無かったかもしれないと思います。

黒川 いよいよ戦後の時代となったのですが、軍隊から帰られてから先生はどうかされたのですか。

織茂 終戦で帰郷して一、二ヶ月は何も手が付かずに家で過ごしていましたが、私の恩師である地元の小学校長から母校に勤めるように勧められました。そこで手続きをして10月から母校の教壇に立ちました。



艦上偵察機 彩雲

黒川 先生は師範の卒業式の前に海軍に入られたので、教職に就くにはもちろんこの時が初めてですね。

織茂 そうです。自分の母校で弟が6年に在学していたので、5年担任になりました。海軍航空隊帰りの若者が、殉国精神を母校の教育活動に向け、指導に専念しました。私にとって最も充実した時代でした。初代引田天功はこの時の教え子です。

黒川 現在の引田天功は女性ですから、その前の天功ですね。

織茂 ところが昭和22年3月に私をその学校に呼んでくれた恩師の校長が退職することによって、私も師に殉じるという訳でもないが、一緒に退職することにしました。退職するとき教育委員会に呼ばれていきましたら、「辞めるに当たって、君が気が付いたことを何でもいいから言って欲しい」というので、「現場には、師範卒業でない、資格の無い先生が黙々と頑張って学校を支えている。こういう人に日が当たるようにしてあげて欲しい」と要望しました。ちょうど六三制が実施される制度の変わり目で、これらの人の中から副校長に任用される人も出てきて、良かったと思います。

黒川 昭和22年というと新制中学が発足した年で、私はその時に中学1年になったのですが、世の中はまだ戦後の混乱期で大変な時代だったですね。よく思い切って退職しましたね。

織茂 幸い航空隊時代に私を可愛がってくれた飛行隊長の紹介で、銀座に本社のあるエンプレスという会社の資材部に就職しました。

黒川 教職からカタカナ名前の会社とは、ずいぶん思い切った転身ですね。

織茂 当時日本には各国の駐留軍が進駐してきましたが、彼らからのベッドや家具の注文が多く、会社はそれらを作って納入し繁盛していました。二ヵ月後に営業部に配置換えになり、広島県海田市に出張して、当時中国地方に進駐していた英豪軍の担当になりました。その後、埼玉のミシン工場を担当してインドにミシンを300台輸出したりしました。

黒川 でもその繁盛していた会社を退職して、また教育界に戻られたわけでしょう。何故なのですか。

織茂 理由はいろいろありますが、急に膨張した会社の内部でいろいろゴタゴタがあり、それが厭で静観するために帰郷してしまったのです。

黒川 利潤追求が第一の民間会社の体質は、先生には合わなかったのかも知れませんね。

織茂 帰郷したあと知人の紹介で結婚したので、



師範時代 左端の先生を囲んでの学習

田舎を出て新たな出発を決意し、日吉駅に近い現在地に転居しました。すると自宅前の小学校に勤める友人が校長と一緒に来られ、教師の欠員があるので教職に戻って学校を支援して欲しいと要請されました。昔とった杵柄ですので暫らくお手伝いしてもよいと思い、その旨を学校側に伝えました。

黒川 新婚早々、会社の方もはっきりしないというのでは不安ですから、学校に戻れて良かったですね。

織茂 ところが教員採用の面接を受けるために委員会に呼ばれたとき、師範の先輩の人事係長から「君は後輩だが、一度教師を辞めたものは後輩と思わない」と言われ、教職員課長のところに行くように告げられました。課長のところに行くと、机上の私の書類には大きく「不適合」の印が押してあります。その書類を見せられた私はやや憤然として、たしかに一度教職は辞したが、それは恩師の校長の引退に殉じて辞めたのであり、問題があって辞めたわけでは無い。その後民間の会社に勤めたが、そこでも真面目に勤務し、刑法上や金銭上の問題を起こしたわけでもない。いったいなにが不適合なのか。そんなことならこちらから採用をお断りする、と啖呵を切りましたが、しかし推薦してくれた校長さんのことも考え、一礼して帰ってきました。

黒川 いやあ、私も一度そんな啖呵を切ってみたかったですね。でもそれで終わったらその後の先生は無かったですね。その後はどうなったのですか。

織茂 たぶん私を採用しようとした校長さんが、話をうまくまとめて下さったのでしょね。古巣にもどった私は、なにしろ家のすぐ側に学校があるので遅くまで仕事に没頭しました。いくら若くても無理が重なったとみえて雪の夜の宿直中に倒れ、胸部疾患で二年間休職しなければなりません。



黒川 伺ってみると、教職に復帰してからも決して平坦な道ではなく、いろいろなことがあったのですね。師範時代の正門 当番の学生が腕章を付けて詰所に立っている。

織茂 復職してからは理科研究会で活動し、屏風ヶ浦小を経て白幡小の副校長になり、本町小のあと綱島小の校長になりました。このあと順調に学校経営の道を歩みたかったのですが、昭和49年の4月に思いがけず市教委の指導課に指導主事として出向することになったのです。

黒川 普通は校長に昇任したあと指導主事になるということは、無かったのではありませんか。

織茂 後には同じ指導主事でも、主任指導主事とか首席指導主事とか区別して序列をつけたような感じがありましたが、当時はそんな区別はないので、校長から指導主事になるのは明らかに格下げの感じでしたね。だから何故なんだと思いました。もっとも給与は下がらないようにしてくれましたが。

黒川 そういう人事をしたのは、なにか理由があったのでしょうか。

織茂 指導課にいてみて分かったのですが、当時市内の某小学校で指導要録記入について揉めていて、PTAも先生たちのそうした行動に不満を持っていました。後で考えると私を指導課に出向させたのは、この問題を担当させるためだったのですね。

黒川 その問題については、私も若い頃に耳にした覚えがあります。

織 茂 地域の不安を治めるために、1学期末に人事異動で七名の先生の転任を実施しました。地域の不安はそれで治まったのですが、今度は異動に反対する教員の仲間が三十数名、教育委員会に押しかけて教育長以下数名の部長を取り囲んで詰問しました。

黒 川 もちろん先生もその場に居られたのですね。
織 茂 そうです。私は持ち前の特攻精神を発揮して押しかけた連中と丁々発止とやり合い、その会場で一晩を過ごしました。朝になり

朝食休憩の後で 10 時半頃再開しましたが、教育長の説明が終ると先方の代表者が「同じ回答しか聞けないのなら帰ろう」と言って、詰め掛けていた教員たちが一斉に立ち上がって帰っていったのでほっとしました。

黒 川 きっと相手の人たちも疲れ果てたのでしょうかね。

織 茂 翌朝、本庁舎へ連絡に行こうと市庁舎の広場に出たら、昨日の代表者が「先生」と駆け寄ってきました。私はちょっとびっくりして「また来たの」と聞くと、「今日は市教委でなく、本庁舎です」と答えたので、私の方へ来る時には事前に連絡するようにと言うと、「ハイ」と素直に元気よく答えました。その声を聞いて私は思わず「頑張れ」と激励してしまいました。



「忙中閑あり」

鎌倉の映画館に入る師範の学生

黒 川 「頑張れ」と声をかけられた相手の人も吃驚したでしょうね。先生の立場としては相手に頑張られては困るわけで、本来ならば「頑張るな」と言いたいところですから。でも思わず「頑張れ」と言ってしまうところにいかにも先生らしい人に対する優しさがありますね。

織 茂 貴方の言われる通りで、私の立場としては言うべからざることを言ってしまったわけです。でも彼らと一晩議論をしてみると、ベクトルの方向は私とは正反対でその点

は賛成出来かねるのですが、彼らの純粋な真摯さには共感できるものがあつたのです。後日、電車の中で彼らの仲間の女の先生に「先生」と声をかけられました。見るとお産が近そうなので「身体を大切にね」と言うと、「ありがとうございます。」と明るくお礼を言って電車を下りていきました。

黒 川 先生の、相手の立場に立って考えるという姿勢は、海軍時代の不当な体罰禁止以来、一貫して変わらない姿勢ですね。その後で先生は間もなく指導課長となられ、更に教職員課長として活躍されるわけですね。

織 茂 教職員課長のあと、養護学校の校長に出ました。

黒 川 教職員課長をなさった方の転出先としては、ちょっと異色の感じもしますが。

織 茂 たしかに私が養護学校に出るについては、いろいろと異論があり、他のポストを提示されたりもしました。しかし養護の校長さん方がいろいろ苦勞されていることを聞き、養護学校の子ども達のためにも自分がその役目を引き受けようと思ったのです。そしてその後、定年退職するまでの7年間を、病弱児養護学校の校長として働きました。現在も「全国病弱虚弱養護学校退職校長会」と「全国病弱養



段葛を往く師範の学生

護教育学校 PTA 連合会」の顧問を勤めています。

- 黒川 織 茂 そのあたりの、ご自分の進むべき道の選択にも、先生の人柄が現れていますね。私は今年 88 歳です。22 歳のとき学窓から海軍に身を投じました。私は実用機教程終了後に練習航空隊で教官配置を命ぜられたために死なずに済みましたが、多くの仲間が戦死しました。人生の若い蕾のまま散った人たちのことを考えると、本当に可哀想に思います。その後に身を置いた教育の世界でも、多くの人と出会いそれらの人たちから力を貰い、今日まで来ることが出来ました。往時茫々として夢の如し、考えると感無量です。若くして散った多くの仲間たちのことを思うと、今後も体力気力の続く限り頑張ってお役にお立ちたいと思っています。
- 黒川 本日長時間にわたって貴重な体験をお話し下さり、有難うございました。本日の対談は、これで終了させていただきます。

